

TOP MUSEUM

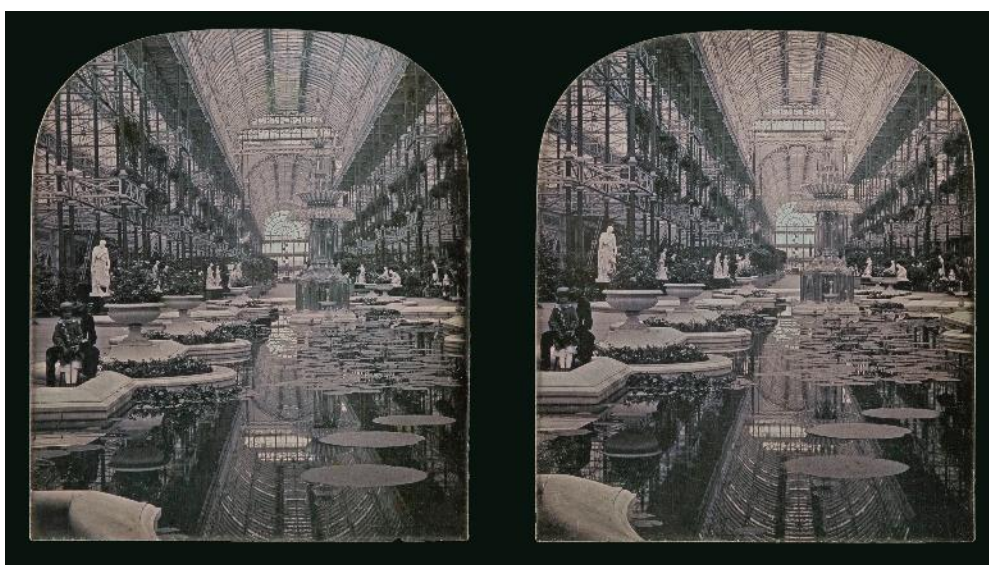
東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku Tokyo 153-0062
TEL 03-3280-0099 FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

TOP コレクション 何が見える？ のぞ 「覗き見る」まなざしの系譜

TOP Collection: A Genealogy of “Peep Media” and the Gaze

2023年7月19日（水）-2023年10月15日（日）



ネグレッティ&ザンプラ《クリスタル・パレス》1854年頃 ダゲレオタイプ 東京都写真美術館蔵

東京都写真美術館では、収蔵作品をより多様な視点でご鑑賞いただけるよう、さまざまなテーマでコレクション展を開催しております。本展では、当館の写真史・映像史に関するコレクションの中から、「覗き見る」ことを可能にした装置と、それによって生み出されたイメージ、そして「覗き見る」ことからイメージーションを広げた作家たちの多様な表現をご紹介します。

写真や映像を撮影するカメラは、まさに「覗き見る」装置であると言えます。カメラの原型となったカメラ・オブスクラは、その機構を流用することで、遠近法と凸レンズの効果を利用して箱の中の景色を楽しむピープショーとして、18～19世紀のヨーロッパで広く流行しました。そのほか覗き見る装置のバリエーションとしては、顕微鏡や望遠鏡などの科学的な装置や、ステレオスコープのような立体視のための装置、動く絵を生み出す装置などがあります。本展では、当時の貴重な装置を、実際に体験できるレプリカを交えながら展示するほか、それらの装置で使用されていた絵や写真も多数紹介。各時代の社会や文化にも触れていただけます。

現代においては、液晶モニターやディスプレイを見ながら撮影する場合も多く、もはやカメラは覗き見る装置と言えないかもしれません。しかしながらむしろ、一人一台カメラ付きスマートフォンを持ち、日々カメラを互いに向けあう今こそ、「覗き見る」まなざしは意識せずとも、私たちの日常生活の一部となっているのではないのでしょうか。

私たちを魅了してやまない「覗き見る」行為と、それによって生まれるまなざし。「覗き見る」まなざしの系譜を、東京都写真美術館のコレクションから探求します。

みどころ

1 今日の光学装置の源流となる「覗き見る」視覚装置の歴史をたどる

東京都写真美術館では 2018 年に「マジック・ランタン 光と影の映像史」を開催し、〈みんなで〉見るプロジェクションの歴史から映像文化を紐解きましたが、本展では〈ひとりで〉覗き見るという視覚形式に焦点を当てます。周囲の視界を遮り、現実とは異なる世界に没入して楽しむ。最近なら VR ゴーグルなどが代表例ですが、同様に光学を利用し、特別な視覚体験を娯楽とする歴史は、いまから 300 年以上前のピープショーに遡ります。カメラ・オブスクラをルーツに持ち、箱に開けられた小さな覗き穴から遠近法を使って描かれた絵を見ることで、単純な構造ながらも覗き見るだけで幻想的な体験ができるピープショーは、姿を変えながら、長く人々に楽しまれました。また、今まで見たことがない更なる視覚体験の追求により、顕微鏡や望遠鏡が生まれ、立体視が可能になり、さらには映画の誕生へとつながります。本展では、覗き見る視覚装置をどのように発展させ、どのような表現が生まれたのか、写真と映像の歴史を横断しながら紐解きます。

2 ピープショーをはじめとするお宝的コレクションと体験型展示

本展は、東京都写真美術館の特長である、写真史と映像史それぞれにおいて貴重なコレクションを展示します。特に第 1 章「覗き見る愉しみ」では、18～19 世紀にヨーロッパで作られた箱型ピープショーや人気が高いペーパーピープショーなどを当時の資料と共に紹介するほか、江戸～明治時代にかけて日本で流行した「のぞきからくり」や「覗き眼鏡」など、会期中に展示替えをしながら歴史的収集品約 120 点を展覧します。展示室では実際に装置に触り、その原理を体験できるレプリカや、2022 年度アジアデジタルアート大賞に入賞した当館オリジナル教材「マジカループ」アプリを体験できるブースを設置するほか、スタジオではアニメーションの原理が体験できるワークショップなども開催。来館者が参加できる展示構成になっています。

3 覗き見る視点を現代作家の解釈で

全 5 章からなる本展では、1 章から 4 章まで、覗き見る視覚装置とそのイメージの歴史を振り返りますが、5 章では、覗き見るという行為を広義的に捉え、現代作家 4 名の作品を紹介します。先進国でのスマートフォン普及率が 80～90%、監視カメラの設置数が世界で 10 億台に達すると言われていた現代において、私たちの周りには、覗き見ることで享受する恩恵と、反対に、意図せず覗き見られる対象となる危うさが共存します。作家たちの視点は、無意識に様々なまなざしと対峙しながら生きる私たちが、どのようにそのまなざしと向き合えば良いかについて考えるヒントとなるかもしれません。



作家不詳《ゾートロップ》19 世紀頃
リトグラフ



作家不詳《スタンド付きブリュースター型ステレオビューワ》
1870 年頃



出光真子《Make Up》1978 年
シングルチャンネル・ビデオ

* 所蔵の記載がない作品はすべて東京都写真美術館蔵

展示構成

1. 覗き見る愉しみ

覗き見る視覚装置の最初期の例として、「ピープショー」と呼ばれる装置があります。ピープショーには様々な形態がありますが、完全に閉ざされた、あるいは半閉鎖的な箱の中に、少なくとも1つの覗き穴があり、そこから景色を見ることができる装置の総称といえます。ピープショーは、カメラ・オブスキラの機構を反転させた構造をもち、実際にカメラ・オブスキラを転用していた例もありました。その始まりについては諸説ありますが、18世紀から19世紀にかけてヨーロッパ各地で流行し、日本でも楽しまれました。

ピープショーには、室内で鑑賞するものだけでなく、見世物師による興行用のものも存在します。17世紀頃から、興行師たちはピープショーや幻燈機を携え、ヨーロッパ各地を回るようになりました。箱の中には、遠近法的な視覚効果をもたらす一枚絵だけでなく、書き割りのように奥行きを強調させる構造をもった絵や、光が透過する細工のある絵など、様々な工夫が凝らされていました。

日本においては江戸時代に、レンズを用いた光学装置が舶来します。その中でも、「覗き眼鏡」として渡来した光学機器は、多くの場合、大名など裕福な家庭で楽しまれました。その一方で庶民の娯楽として愉しまれたのは、屋外で興行される「のぞきからくり」でした。同時に、小型の家庭用玩具としての覗き見る装置も考案され、様々な形態が江戸から明治、大正期において人々に親しまれていました。

出品作品：カメラ・オブスキラ、眼鏡絵、覗き眼鏡、ピープショー、のぞきからくり



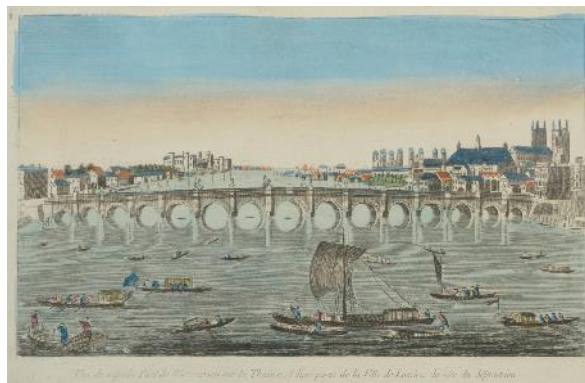
作家不詳《カメラ・オブスキラ》
19世紀頃 木、ガラス



作家不詳《光学箱》19世紀頃 木、ガラス



作家不詳《ペーパーピープショー
「1851年ロンドン万博水晶宮の内景」》
1851年以降 リトグラフ、手彩色



作家不詳《眼鏡絵（ウェストミンスター寺院遠望）》
1850年頃 エングレーヴィングに手彩色

* 所蔵の記載がない作品はすべて東京都写真美術館蔵

2. 観察する眼

16 世紀末から 17 世紀初頭に発明された顕微鏡と望遠鏡は、どちらも覗き見ることで人間の視覚を飛躍的に拡張させる機能をもった装置といえます。両者によってもたらされたイメージは、当初、目で見たイメージを描き映す、描画によって人々に共有されました。しかしながら描画は、描く者の技量に左右され、客観性を疑われかねないという欠点がありました。19 世紀半ばにおける写真術の登場によって、広い範囲に正確に、顕微鏡や望遠鏡によって得られたイメージを共有することができるようになりました。

観察する対象を客観的にまなざすカメラの眼は、肉眼では捉えることのできない一瞬の動きを切り取ることを可能にします。1870 年代初頭から連続写真の実験に没頭した写真家エドワード・マイブリッジは、1878 年にギャロップで走る馬の写真を発表しました。生理学者であるエティエンヌ＝ジュール・マレーは、連続写真の公表を機にマイブリッジと出会い、のちに写真銃やクロノフォトグラフィの発明に至ります。

本章では、私たちの眼の延長であるカメラによってもたらされた、肉眼では見ることのできない遙か彼方の光景や、ミクロの世界、一瞬のイメージをご紹介します。

出品作家：ウィリアム・ベンジャミン・カーペンター、ロール・アルバン＝ギヨー、エドワード・マイブリッジ、エティエンヌ＝ジュール・マレー、ハロルド・ユージン・エジャートン



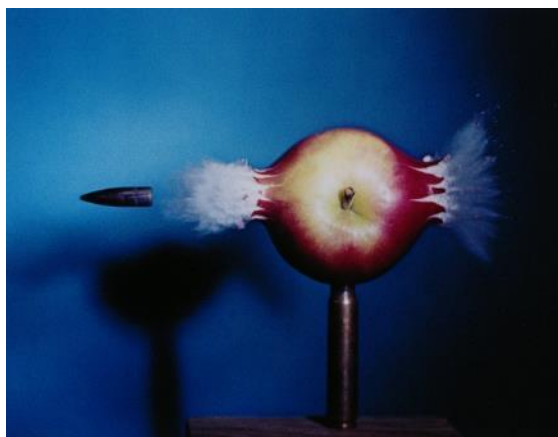
ウィリアム・ベンジャミン・カーペンター
《ウニのとげと断面》1848-1849 年 ダゲレオタイプ



NASA 《月の影》1966-1968 年 ゼラチン・シルバー・プリント



エドワード・マイブリッジ 《馬と人間》1878-79 年 鶏卵紙



ハロルド・ユージン・エジャートン 《りんごを貫く 30 口径の弾丸》
1964 年 ダイ・トランスファー・プリント
©2010MIT. Courtesy of MIT Museum

* 所蔵の記載がない作品はすべて東京都写真美術館蔵

3. 立体的に見る

異なる角度から撮影した 2 枚の写真（ステレオ写真）を、ステレオビューワと呼ばれる装置を使って左右の眼からそれぞれ同時に見ることで、立体的に見ることを可能にするステレオスコープについての最初の論文と装置は、物理学者チャールズ・ホイットストーンによって 1838 年に発表されました。ホイットストーンは当初、幾何学の線画を立体視の対象としていましたが、写真術が発明されその技術が普及すると、ダゲレオタイプやカロタイプなどの写真を用いるようになります。

ホイットストーンが考案した（ステレオ）ビューワは大型であったため定着せず、その後爆発的な流行を見たのは、科学者デイヴィッド・ブリュースターにより 1849 年に考案された小型のレンズ式ビューワでした。ブリュースター型のビューワは、光学技師のジュール・デュボスクによって製造され、1851 年のロンドン万国博覧会にステレオカード（ステレオ写真をカード状にしたもの）とともに出品されると、大きな話題を呼びました。ステレオ写真の需要の高まりにより、撮影用のカメラも開発されます。その後、オリバー・ホームズによる持ち運びが簡単なビューワが登場したこともあり、ステレオスコープは大きな流行を生み、人々は写真に写された世界を現実さながらに立体的に見ることに熱中します。

強調された立体感と奥行き、さらに強い没入感をもたらすステレオビューワは、その誕生から 1 世紀以上前に、同様に人々を夢中にさせた視覚装置、ピープショーと重なります。現代において、ヘッドマウントディスプレイを装着し VR を体験する私たちの姿も、この歴史の連なりの中の一部といえるでしょう。

出品作品：ステレオスコープ（ビューワ）、ステレオカード



ネグレッティ & ザンプラ 《クリスタル・パレス（ステレオビューワ）》1854 年頃



作家不詳 《ステレオビューワを覗く子ども》19 世紀頃



下岡蓮杖 《人形遊びをする子どもたち》1866-1876 年頃 鶏卵紙

* 所蔵の記載がない作品はすべて東京都写真美術館蔵

4. 動き出すイメージ

現在の映画の原型といえる映像装置は、リュミエール兄弟により 1895 年に一般公開されたシネマトグラフとされています。しかしながらリュミエール兄弟の他にも、多くの人々が動く像の実現に情熱を注いでいました。19 世紀には残像現象や錯覚を利用して、静止画像を動く絵へと変容させる多種多様な視覚装置が発明されます。

物理学者ジョゼフ・A・F・プラトーは 1832 年に、網膜上の残像現象によって映像を生み出すフェナキスコープを製作します。1834 年にはウィリアム・G・ホーナーが、プラトーの装置を改良しゾートロープを考案しました。さらにエミール・レイノーはプラクシノスコープと呼ばれる装置を作り、1877 年に特許を取得します。蓄音機や白熱電球などの発明家として著名なトーマス・エジソンは、写真家であるウィリアム・ディクソンの協力のもと、撮影装置キネトグラフと映写機キネトスコープを開発し 1891 年に特許を申請、1894 年にはニューヨークの「キネトスコープ・パーラー」で一般興行が開始されました。キネトスコープは、箱の中を覗き込んで映像を見る装置であり、同時に一人しか鑑賞することができないという特徴がありました。

一度に鑑賞できる人数が限られるという効率の悪さから、映画の興行形式としての軍配はシネマトグラフに上がります。しかしながら、スマートフォン等で一人一人が個別に映像を鑑賞するという現代の個人視聴のあり方は、キネトスコープの再来ともいえるかもしれません。

出品作品：ゾートロープ、プラクシノスコープ、フェナキスコープ、キノーラ、キネトスコープ（フィルム制作：石川亮）



作家不詳《プラクシノスコープ》
19 世紀頃



作家不詳《フェナキスティナスコープ箱付き》（キネトスコープ レプリカ）制作年不詳
19 世紀頃



5. 「覗き見る」まなざしの先に

外界の景色を写し出す装置であったカメラ・オブスクラは、カメラという、対象を覗き見てシャッターを押し、写し取ったイメージを手にする装置へと発展しました。

カメラを介することで、覗き見る主体と対象を結び付け、親密な関係をもたらすこともできる反面、カメラはときに対象に冷酷かつ暴力的なまなざしを向けることもあります。自らの姿を隠し対象を一方的に覗き見る窃視的なまなざしは、現代社会において遍在する監視カメラや、盗撮といった犯罪行為にまで及びます。また、医療行為においては心身の健康を守るために、身体の内部を覗き見る技術が高度に発展し、私たちの身近な存在として浸透しています。



伊藤隆介《オデッサの階段》2005 年
シングルチャンネル・ビデオ・インスタレーション

* 所蔵の記載がない作品はすべて東京都写真美術館蔵

覗き見ることは、まなざしの不均衡を生む行為でもあり、愉しみの中にあやうさを孕みます。一人1台カメラ付きのスマートフォンを持ち、日々カメラを向け合い、気づかないうちに被写体として切り取られる私たち。日常にあふれる「覗き見る」まなざしとどのように向き合い、それをどのように受け止め、まなざし返し、世界を切り取るという行為を再構成することができるでしょうか。奈良原一高、オノデラユキ、出光真子、伊藤隆介の4名の作家たちの探求から、「覗き見る」ことの可能性と、その先にあるまなざしのあり方を考えます。

出品作品：奈良原一高、オノデラユキ、出光真子、伊藤隆介



奈良原一高 《インナー・フラワー：ばら・ティネケ》〈空〉より 1991年 ゼラチン・シルバー・プリント



出光真子 《主婦の一日》1977年
シングルチャンネル・ビデオ



オノデラユキ 《No.1》〈Camera〉より
1997年 ゼラチン・シルバー・プリント

出品点数

267点（予定） ※会期中に1回展示替えあり

関連イベント

トーク、レクチャー

- ・出品作家によるアーティストトーク（1Fスタジオ）
9月9日（土）講師：石川亮（出品作家）、南俊輔（映像作家）
10月15日（日）講師：伊藤隆介（出品作家）
- ・「覗き見る」メディアとイメージをめぐるレクチャー（1Fホール）
9月24日（日）講師：草原真知子（本展協力者）、細馬宏通（早稲田大学教授）

ワークショップ

- ・TOP ボランティアによるアニメーションワークショップ
7月29日（土）、30日（日）
- ・映画のはじまり体験ワークショップ
8月19日（土）講師：郷田真理子（フィルム技術者）
幻灯機や映写機など色々な映像装置を体験しながら、プラクシノスコープでアニメーションを作成

ギャラリートーク

- ・展覧会担当学芸員によるギャラリートーク
7月21日(金)
- ・展覧会担当学芸員によるギャラリートーク(手話通訳付き)
8月18日(金)、9月15日(金)、10月13日(金)

展覧会図録

『TOP コレクション 何が見える? 「覗き見る」まなざしの系譜』

B5変型(W182mm×H240mm)、176ページ、発行元:東京都写真美術館、価格未定

草原真知子(本展協力者、早稲田大学名誉教授)および担当学芸員によるテキスト、出品作品図版を掲載

開催概要

展覧会名[和] TOP コレクション 何が見える? 「覗き見る」まなざしの系譜

展覧会名[英] TOP Collection: A Genealogy of "Peep Media" and the Gaze

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

会期 2023年7月19日(水)～2023年10月15日(日)

会場 東京都写真美術館 3F 展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0099 www.topmuseum.jp

開館時間 10:00-18:00(木・金は20:00まで) 入館は閉館30分前まで

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は翌平日)

観覧料 一般700円/大学・専門学校生560円/中高生・65歳以上350円

※小学生以下及び都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2名まで)は無料。

※オンラインで日時指定チケットを購入いただけます。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

*図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

*図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM 電話 03-3280-0034/FAX03-3280-0033

展覧会担当 遠藤みゆき/多田かおり

広報担当 池田/平澤/鈴木 press-info@topmuseum.jp

本展は諸般の事情により内容を変更する場合があります。最新情報は当館ホームページをご確認ください。